

横津岳の湿原

雄 英 像 宗

沼(一一〇〇m)であり、もう一つは横津と烏帽子のほぼ中間にある前沼(一〇六〇m)であり、他の一つは烏帽子岳(二〇七〇m)の北西側直下にある烏帽子沼(一〇三〇m)である。三つの湿原に共通することはいずれも小規模であること、湿原といえれば一般に山間の低地とか山峡に多いのが普通なのに、台地性とはいえ龜田山脈最高地の稜線上に形成されているということである。

横津岳の台地性の頂上部はコケモモ、ガンコウラン、シラタマノキなどの矮小低木が敷きつめ、草本としてはヒメスゲ、ネバリノギラン、チシマフウロ、エゾトウヒレン、エゾオヤマリンドウなどが季節に応じて姿をみせる。

渡島山脈から南東に分岐して、活火山恵山に終る支脈が龜田山脈である。主峰の横津岳とその南東に連なる烏帽子岳と袴腰岳とが千mをわずかに越える稜線を構成しているのみで、他は丘陵性の低い山波である。

横津岳の広大な熔岩台地が緩やかに起伏して烏帽子岳に続くわずか四キロの間の稜線上に小さな湿原が三つある。一つは横津岳頂上(一一六七m)近くの雲井

頂上部から標高にして五〇〜八〇mほど下降した頂上周辺部は緩傾斜の広大な熔岩台地で矮生化したチシマザサが敷きつめ、その間にハイマツ、ミネヤナギ、チシマザクラ、ミヤマナカマドなどの大小の低木叢が群島状に散在し、その周



泥沼に化した雲井沼

辺には寄り添うようにハリブキ、オオタカネバラ、クロミノウグイスカグラなどが見られ、また、ハクサンボウフウ、エゾイブキゼリ、カラマツソウ、ハクサンチドリなどの草本も単調なササ原に季節の色どりを添えている。

◇ ◇
このような環境の頂上部に近いところ

に雲井沼湿原がある。南北に約八〇m東西に約四〇mほどのほぼだ円形の小湿原である。東半分は半月形のコルクで水深三、四〇cm、オヒルムシロが浮かび、東側の水辺にはミツガシワが帯状に群叢をつくっている。西半分は厚いミズゴケに被われ、モウセンゴケ、ツルクケモモが混生し、その西辺をスゲの仲間が帯状に阻んでいる。ミカ

ズキグサ、ホロムイスゲ、ミダケスゲ、ワタスゲ、イトキンスゲなどで、ミツバオウレン、クロバチロウゲ、タチギボウシなどを混ぜている。

雲井沼は以上のように、小粒ながら高層化したつる湿原の要素をコンバクトに備えた珠玉のような湿原であった。「あった」というのは、現在は大半が破壊されてしまったか

らである。昭和三十九年、函館開発建設部が頂上に建設した無線中継所に至る車道（湿原の西五〇m）工事の土砂が流入し、スゲとミズゴケの地帯を埋没してしまつた。そのうえ、土産子馬の無断放牧が続き、その水飲場となつたらしく、湿原は目茶苦茶に踏み荒された。現在は単なる一この泥沼と化し、復元の可能性は乏しい。

◇ ◇

この地域は横津山頂を中心に二万一千haが水源涵養保安林に、一千四百haが鳥獣保護区に、八二七haが道自然環境等保全条例による自然景観保護地区に、それぞれ指定されている。法や条例があつても、運用する役人の頭が旧態依然たる骨董品なので効果のほどは期待できない。

三重に法や条例の網をかぶっている横津岳もその例に漏れず、いままた昨年からは頂上の無線中継所に並んで航空局の航空路監視レーダー基地（五階建のビル）が建設中で、大型ダンプが高山帯を走っている。このため頂上の本道最南端の高山性ハイデは、完全に潰滅した。さらに周辺自治体や企業家の間には大沼公園と連絡する観光車道「横津スカイライン」建設の構想が抱かれている。

他の二つの湿原、前沼と烏帽子沼は共にほぼ八〇m四方ほどの広さを持ち、融雪期には僅かな湛水がみられるのみで、雲井沼のようなコルクはない。中央部のミズゴケ地帯にはツルコケモモ、ミツバオウレン、ミカズキグサ、グレーンズゲ、ヤマアゼスゲなどが混生し、周辺部にはミズゴケが少なく、エゾイソツツジ矮生化したチシマザサなどが侵入しはじめており、また谷地坊主が点在している。阿湿原ともボーリングなどによる成因の究明は一切行われていないが、地形的にみてコルクから高層化したものではなく、一種の雪田と見なす可きではなからうかと思つている。

（南北海道自然保護協会会長）

★ 本誌に掲載のカット、文章などを無断でつかわれると版權盗用になりますからご注意ください。★